

環境に視野を広げた高等学校の美術の授業

井出 泰彦¹

環境問題に対する社会の関心がますます高くなっている今日において、美術科の視点で環境教育を行うとすると、どのような授業の取り組みができるだろうか。生徒の意識調査結果等の考察を踏まえ、主に街や都市の景観・住環境・野外彫刻等を取り上げた授業実践を試みた。

はじめに

今日、環境問題に対する社会の関心がますます高くなっている。教育においても、環境に関する学習を今後一層重視する必要があるとされている。

今まで環境問題というと、ダイオキシン問題や環境ホルモンや酸性雨など自然破壊的なものがよく取り上げられているが、本来環境というものは、自然環境だけでなく社会環境も含め、もっと幅広いとらえ方がなされている。したがって環境問題は、いろいろな視点から提起し、その対策の取り組みがなされなければならない。そこで、美術科の視点で環境教育を行うとすると、どのような授業の取り組みができるだろうか、また生徒にどのような環境に対する意識づけができるだろうかを考えていくことにした。美術科目の持つ特性を生かし、視覚や美的感覚を通して環境をとらえることによって、環境を考える上での新たな問題提起も示せるはずである。いくつかの授業実践例と考察をここに示すことにする。

なお、本研究は下記の先生方の多大な協力を頂きました。深く感謝いたします。

<調査研究協力員>

岩澤 御園 神奈川県立 保土ヶ谷 高等学校
男谷 浩一 神奈川県立 逗 葉 高等学校
橋井 香苗 神奈川県立 港 北 高等学校
真鍋 友範 神奈川県立 生 田 東 高等学校

<教育指導員>

白井 弘

研究の内容

1 環境につなげた美術教育

今までの美術の授業は、個性や自己表現を重視するあまり、個の表現活動と作品自体の鑑賞に重点が置かれ、社会や環境につなげた（目を向けた）美術教育は意識的には行われていなかったのではないかと思われる。感性の教育のもとに、美術の授業で表現や鑑賞の活動を通して育まれてきた美への感覚を、個人的なものから、身の回りの生活環境や社会に目を向けることによって、美的な面から環境をとらえ直すことができるはずである。色彩や形や作品が、実際に社会、生活、環境にどのように役立っているのかを具体的に示すことによって、美術というものが自分たちにとって深く関わっていることを知ることができるだろう。そして、たとえば環境にふさわしい色彩を考えたり、景観についての問題点を見つけることができるような能力や感性が育てば、自ら主体的によりよい環境作りに関わっていけるようになり、環境に対する意識や認識も一層高まっていく。誰もが住民の立場で、美観の保護、色彩計画、野外作品の選定・設置などについて考えることができることに気づくのである。無関心、何も感じないということからの脱却である。そこに美術を通しての環境教育の大切さを思う。

環境という広いテーマから、特に美術教育が関わるものを探っていくと、上記のような理由により、街（都市）の景観、住環境、野外作品などを題材に取り上げるのがよいと思われた。それらは、生徒が身近なものとしてとらえることができるとともに、色彩、形、空間や作品という美術の要素を通して考えることができるからである。

1 教科第一研修室（美術） 研修指導主事

2 生徒の意識調査から

生徒が野外彫刻や景観などに対してどのような意識を持っているかをアンケート調査（2年325人、1年23人）した。公園などに設置されている野外作品を見てどう感じるかという問いに対しては、「何も感じない」「ない方がよい」と思っている生徒が合わせて32.5%おり、さらに「見たことがないので分からない」という生徒が23.3%いた。やはり無関心の表れであろうか。「見たことがない」という中には、作品の存在に気づかないで見過ごしてしまうこともあるのではと考えると、目を引きつける作品が少ないということであり、そうであるならば設置する側の問題もあるといえる。一方、街角や公園などへの美術作品の設置は街の景観や環境に必要なかという問いに対しては、58.4%の生徒が「必要」または「どちらかというとな必要」と答えている。かなりの生徒が、野外作品が環境にプラスになっていることを潜在意識では知っているということであろう。また、自分たちの生活している街の景観や環境をよりよくすることへの関心については、57.4%の生徒が「関心がある」または「どちらかというに関心がある」と答えており、美術で教わってきたことをどのように環境へ役立てたいかという問いでは、約75%の生徒が何らかのかたちで環境に関わっていきたいと思っている。その中でも「自分の部屋の配色や配置を考えたりして、ごく身近な所から関わっていきたい」と答えた生徒が一番多かった。教師がきっかけをうまく与えることによって、環境への関心が一層高まっていくであろう下地は充分にあり、そのための支援・指導は、生徒の身近なところから始めるのがよいということが感じられた。

3 どのような取り組みが考えられるか

それでは、実際に美術の授業で、環境についてどのような取り組みがなされるべきか考えてみたい。

アンケートの考察でも述べたように、まず生徒の身近な環境の中から題材を見つけていくことが大切であるとした上で、大きく分けて次のような二つの体験をさせることが重要だと思える。

a 実際の社会・環境の中に目を向け、実際に見る体験

b 実際に環境作りを自分たちの力で主体的に行う体験

教室で資料を提示しながら教師が話すだけでは、

本当の興味関心は引き出せない。環境について考えたり取り組んだりすることの面白さ、有意義さを、実際の現場で生の体験として感じ取れば、そのことが意識の中に強くインプットされるはずである。

aについていえば、ファール立川のような、環境の中に野外作品を積極的に取り入れている地域を実際に見せて感想を書かせたりするのもよいが、もっと身近な例でいえば、たとえばファミリーレストランなどの店内配色が、どのように効果的に工夫されているか（同じ軽食産業でも会社によって微妙に配色が違う）、あるいは逆に色彩が環境に害を与えているような場所が近くにあるだろうかなどを調べてみるのもおもしろい。野外彫刻が周囲の空間や都市機能（または自然）とどう結びついているか、シンボルとしてそれが街や都市に魅力を与えているかどうかなども、実体験で感じとってもらいたい。

bについていえば、授業で制作した作品を、学校の廊下やスペースに工夫して展示することによって、学校としての環境を整えることが、よく行われている方法としてまず上げられる。また、防波堤などをキャンパスにして、子どもに絵を描かせる試みも、最近はいろいろな地域で行われている。もっと思い切った方法としては、建築物自体を実際に生徒たち自身にリフレッシュさせることなどもおもしろい。自分たちの力によって（働きによって）環境をよりよいものに変えることができたという満足感が得られれば、教育的効果はより大きなものになる。

環境に必要な不可欠な色彩の学習（性質、心理的効果、トーン、混色の仕方など）も、以上のような直接体験を通して行えば、より効果が上がるだろう。さらには、美術の持つ力が、いかに個を越えて社会や人間の生活に役立っているかも実感を伴って知ることができるはずである。

以上で述べた体験の他に、美術と環境を関連づけたテーマで話し合いや討論を行うことの重要性も上げておきたい。環境や景観については、住民参加の形で自分たちが自ら考えなければならないことであるという意識を持たせるためにも、生徒に話し合いを持たせることは大切である。

4 具体的な授業の実践

以上の考察を踏まえて、調査研究協力員のそれぞれの学校で、環境を取り上げた美術の授業の実践を行った。実践例は次の通りである。

A校

「学校の中庭のリフレッシュ計画」

- 普段見慣れた身近な環境である学校の中庭に目を向け、その構造に気づかせ、環境をデザインするということを気づかせる。
- 中庭のリフレッシュ計画を考え、居心地のよい環境にするために必要な物、色彩を考える。
- リフレッシュ計画をイラストボードに描き表し、その中に表わされている設置物については模型を作り、リフレッシュ計画のイメージを具体化する。

B校

「都市の環境を考えてみよう」(夏休みの課題)

- 都市や街中にある人工物に目を向けさせ、美的な面から都市の美について考えてみる。
- 都市や街中にある様々な人工物から形や色、材質等に注目し、自分にとって気に入ったものと気に入らなかったものをそれぞれ選び出し、写真に撮り、その理由を書く。
- 都市空間を美しくするためにはどうしたらよいか、考えをまとめてみる。

「自分にとって理想的な空間を描く」

(詳細は学習指導案)

C校

「美術室改造計画(環境と美術のかかわりから)」

- 環境という広いテーマを、環境とはどういうものか、美術はそれにかかわれるのか、自分たちができることは何か、を話し合いながら絞り込んでいくことで、生徒の意識を高めていき、その上で共通に身近である美術室の環境について考える。
- アイデアを図柄で表現する。
- 過ごしやすいとはどういう所かの考察をする。
- 各生徒が話し合う場を設けるところに重点をおく。

D校

「学校の塗り替えが必要な壁面をどう塗り替えるか(フィールドワークと実践を伴った色彩授業)」

- 壁面の汚れを補修するという意味ではなく、色彩学習の延長で実施する意味での塗装体験とする。
- 学校の壁面を環境創造の場としてとらえる(学校の壁面の教材化)。
- 具体的体験を通して、色彩効果を実感し、環境への関心を高め、さらに公共心の育成と、美術を介在したボランティア活動の実践へとつなげる。
- 色彩学習を通して生徒に色彩計画を立てさせる。
- 塗装作業はグループ交代で行う。

学習指導案「自分にとって理想的な空間を描く」

- 題材設定の理由 身近にある都市の空間に目を向けさせ、そこから自分の価値観(何を美と感じるのか)を確認させる。また現実の都市空間の問題点を考え、自分にとっても理想的な空間を導き出す。
- 指導目標
 - ・ 周りの環境に目を向けさせる。
 - ・ 自分にとっての理想的な環境を考えさせる。
 - ・ 言葉や文字に変わるものとして色彩のトーンを活用する。
- 指導計画
 - ・ 夏休みの課題「都市の環境を考えてみよう」のプリントについての講評。(1時間)
 - ・ 自分の使うトーンの確認。気に入った色や形の確認。理想とする空間をイメージしデッサンする。(2時間)
 - ・ デッサンをもとにスケッチブックに下描きし、ガッシュで着色する。(6時間)
 - ・ 講評・アンケート。(1時間)
- 準備 スケッチブック(F8号)、わら判紙、色彩プリント、ガッシュ(12色)セット、夏休みの課題プリント

○指導過程

	学習内容	留意点
導入 1時間	夏休みの課題「都市の環境を考えてみよう」をもとに、どんな都市の人工物を美しいと感じ、また美しくないと感じたのか。また「どうしたら都市の空間が美しくなると思うか」の設問に対して出された意見について講評する。	都市の人工物の中で、何が美しく、何が美しくないのか、自分の価値観を再確認させる。 どうしたら都市空間が美しくなるか、自分の意見を再確認させる。
展開I 2時間	自分の気に入った色や形を再確認させ、作品の中に使うことの意味を説明する。 理想的空間の姿をイメージしデッサンする(下描き)。 自分の気持ちを表現するための、理想的トーンを選ばせる。	個性の伸長につながる点を理解させる。 3種類の空間「まったくの空想の空間」「公共の空間」「私的な空間」から一つを選択させる。 一学期に作った色彩プリント(トーンの練習用プリント)を活用させる。
展開II 6時間	下絵がきを完成させる。 下描きをスケッチブックに描く(鉛筆使用) 各トーンの色を作り方を説明する。 ガッシュで彩色する	下描きは輪郭線描き。主題の入れ方や構図に注意させる。 色彩プリントを活用させる。 自分の表現したい感情を大切にさせる。補色や明度、彩度の対比に注意させる。細部まで丁寧に彩色させる。
まとめ 1時間	アンケートの実施。 図柄の内容説明と、色彩について工夫した部分、自分で気に入っている部分等。	なぜその図柄になったのか。 自分の感情をトーンを意識することによって表現できたか。

- 評価
 - ・ 自分の気に入った(美しいと感じた)色や形が作品の中で積極的に使えたかどうか。
 - ・ 自分の感情を表現する手段として、意識的にトーンが活用できたか。
 - ・ 身の回りの環境をもとに、そこから自分にとっての理想的な空間を表現できたか。

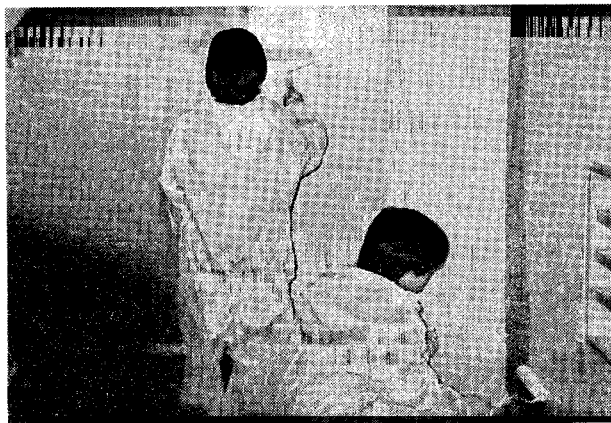
5 各実践を通して分かったこと

各実践とも、今まで以上に環境への関心を高め、意識づけができたという点で成果があった。

D校の場合は、生徒は紙製のつなぎの服(写真参考)を着て宇宙服のようだと楽しみながら、日常においては業者の現場作業というイメージが強い塗装というものを実体験した。その新鮮な体験は、将来きっと役に立つことであろうと、終了後の生徒の感想文(色の美しさや作業の楽しさに対する感動、達

成感などが主)から確信できた。生徒は環境への関与の仕方の具体的な方法を、塗装の初歩的技術とともに学んだことになる。また教職員からの賛同も得られ、今後の学校環境向上の効果を生徒と共に実感できた。話し合いを重視したC校は、生徒の様々な考えをお互いに聞き合うことにより、関心や意識が高まった。また生徒の考えから、環境に関連した題材の示し方に対して教師に新たな視点を与えてくれることにもなった(生徒は意外に環境と自然を結びつけて考えていることがわかった)。B校は、生徒は身近な現実(都市空間)を直視し自分の価値観を改めて考えた。そして現実の空間をもとにして生徒はそこから新たな創造的な発想を生み出すことができた。A校の生徒は、中庭に対する思いから発展して、自分の学校の空間や構造をより意識的にみるようになった。

以上の授業から、生徒が自発的に今まで見過ごしていた現実や空間を直視することによって、あるいは話し合いや環境作りの実体験によって得られたことは大きかったといえる。そこからやがて、環境だけでなく社会全体にも目がいき、自治体のあり方や自分たちがこれから何をしたいらよいかなど、生徒が自ら考えていけるようになることを期待したい。



生徒に、環境によい色彩を考えさせる場合、実際には生徒はトーンを考えないで、彩度の高い色を安易に使ってしまうことが多いのではないと思われる(色彩の学習を通して、なかなか思うようなトーンが作れないのが現実であろう)。生徒の色彩計画を実際に壁面等に採用するような題材においては、そのような時、最終的には生徒の案を尊重しながらも、教師が色を選ぶ(考える)ことになる場合が考えられる。その場合は、なぜそうなるのか適切な指導により納得させた上で、教師の選んだ色と自分た

ちの色の違いを意識させたい。トーンを考えないで作った自分の色が、実際にはあまり使われていないことに気づかせることも必要である。そのためには教師がよい場所(ファミリーレストランの店内とか、色彩効果をよく考えている場所など)を知っていることが大切である。それとともにさらに効果的な色彩指導の工夫が求められる。色彩カードを利用してトーンの作成練習などを行うのも効果的であろう。当然のことだが教える側も、色彩の性質、トーンなどについてよく理解しておく必要がある。

学校の美術室以外のスペースを利用する授業などの場合は、学校の理解と協力を得る必要があり、そのためにはしっかりとした美術教師側のねらいと目的がなければならない。より快適になった空間のよさを学校全体で体感し、生徒と職員共に喜びを共感できればさらによいだろう。

6 今後の課題

今回の研究では、美術の授業が環境に関わるものとして、主に街や都市の景観、住環境、野外作品などに絞って取り上げたが、実際にはまだ他にも取り組めるものはある。たとえば絵の具や材料の処理からくる環境問題、または絵本やポスター制作などを通しての啓発など、いくつか考えられる。

また視点を変えれば、美術だからということで創り出すことにとらわれなくて、逆に余計なものを増やしていかないためにはどうしたらよいか(選定の力)を考えたり、素材(例えば紙)についての知識を深めたり、自然との関わり(自然にもともとある色のよさを知るなど)でとらえたりというような環境についての取り組み方法も考えられる。まだまだ考えていくべき授業の工夫や課題は残っている。

おわりに

最近、若者たちの間に、自分の部屋を派手な色彩で飾ることが流行っていると聞くと、そのような興味関心を個人的な生活環境だけにとどめなくて、もう少し外や社会に向けてみたらどうだろうか。

美術で扱ってきた色や形が、単に作品や個人の好みのためにだけあるのではなく、社会や環境の中に関わるかが重要なのである。

本研究が、今後、環境に視野を広げた美術の授業を行う上で少しでも役に立つことを願っています。